

石見銀山の世界遺産登録と学術研究

城西国際大学大学院客員教授

脇 田 晴 子



はじめに

ご紹介に預かりました脇田晴子でございます。

石見銀山が散々もめた挙句世界遺産に登録されたことは、めでたいことでございます。今はそういうことで石見銀山は見学の人たちでいっぱいだそうですけれども、また少しすいた頃には是非お出かけになってください。

私は最初、石見銀山の世界遺産登録というのは大体何かよくわからなくて「え？ それなんで狙うの？」なんて聞いていたのですが、まあその中へどっぷりつかってしまいました。そういう苦労話を聞いていただけたらと思います。

ここでは世界の巡礼の中で四国巡礼（遍路）を見ようという試みだそうですが、私自身鳴門教育大が出来た頃から6年間ほど参っていたことがございます。その時から巡礼には非常に関心をもっているのですが、とてもいいテーマだと思います。

巡礼の経験と申しますと、私は四国巡礼を大方歩きました。その方の研究の先駆者である五来重先生ですが、私は以前、橘女子大というところへ勤めておりました。民俗学の研究がしたいと思い、そこで生活文化史ということで民俗学を研究されていた五来先生に来ていただいたのです。大先輩ですので、その前に五来先生の本を読み、質問をだーっと箇条書きにカードにしておいて、聞きましたら「僕はここへ来たらモルモットになったような気がします」とおっしゃるので、さすがに慎みました。

そして鳴門教育大学に参りましたら、五来先生が学生やカルチャーセンターの方々などを連れて、その方々はどこかへ泊まれるのですが、お弟子のフランス人のアンヌ・ブッシィさんという方、今フランスで活躍されていますが、こゝ、愛媛大学へ留学されていたクワメさんの姉貴分に当たる方です。その方と二人で私の宿舎に来て何日か泊まれて、自動車で順番に巡礼に参りました。ところが五来先生は案内するのに、八十八箇所だけでなく奥の院まできっちり行かれるわけです。ひいひい言う、「あなたより私の方が何ぼか年寄りだ」と怒られまして、ぶつぶつ言いながら付いて参りました。だから、山の方にある奥の院とかに参りました。海の方にあるのまでは流石に船に乗ってまで行きませんでした。そして、五来先生の説を色々とお聞きしたわけでありませう。

他に、内田先生はじめこの大学で書かれました御本を読ませて頂きましたら、私はあれは3分の2くらい大方行っております。私は歴史学は足で歩いて考えるというのを口実にして見に行くのが好きですので、大体行っております。ここで言いますと、つい最近、もと勤めていた大阪外国語大学の友人たちと行ったのはサンチャゴ巡礼であります。サンチャゴ巡礼の出発点でありますフランスのトゥールーズから山を越え

て行くのがある。それを友人のアンヌ・ブッシィさんが連れて行ってくれるというのですが、忙しい人で私が生きている間に行けるかどうか分からないというので、パンプローニャ近くのシャビエル城、フランシスコ・シャビエル生誕の地ですね。そのシャビエル城を最近復元いたしまして、綺麗になりすぎているというのが私の感想ですが、パンプローニャというところからそこへ行きまして、そこからまたパンプローニャに帰りまして、そこからずっとバスクの道を通って、サンチャゴまで、そのバスの運転手が大きいのが好きだとかいうことで大型バスに7、8人乗って、泊まり泊まってずっと参りました。

私の感想はと言いますと、西洋の建物というのは皆大きくてがっちりしてて立派ですから、あんまり親しみが無い。途中はバスクの辺の今は北スペインになっているわけですね、バスク人がすごい反抗して、頑張ったわけですけども、その辺を大きな銀行がたくさん建ってまして、世界の金融を支配しかけているとか何とか。ちょっと立派過ぎて、親しみが無くて、そういう意味では、四国に来たからおべんちゃらと言うわけではありませんが、四国の巡礼道やお寺というものは、やはり昔の雰囲気を残していて、いいなあという風に思いました。

(一) 石見銀山の世界遺産登録へ向けての歴史文献の調査の経過

その話もたくさんあるのですが、石見銀山の世界遺産登録の話、というご要望ですので、私あまり敬虔なところではなく遊びに行った、文字通り遊びに行くわけですが、しかしやはり歴史学というのは百聞は一見にしかずというところがありまして、文書だけ見ても一つも分からない。現地を見ないと。現地を見て帰ってきたら、例えば専門の中世の話ですね、そういう場合には、やはり史料解釈が違う。だからやはり現地を何回も行かないと。史料見ては現地、ということをもットーにしております。

それはともかくとしてですね、石見銀山の世界遺産登録に向けての歴史文献の研究調査というお話から参ります。実を言いますと、私は世界遺産の何たるかを知らなかった。奈良・京都のお寺がいっぱいそういうのになったら、まあ修復をべたべたと増加したりしなくなるので良いだろうという感じしかなかったんです。

それがある日、同級生の田中琢さんという考古学の方で、奈良文化財研究所の所長や昔の文部省の鑑査官などをされていた友人から、「石見銀山に行かへんけえ？」と電話がかかってきたので「誰と？」と聞くと「僕とや」と。「あんたとアベックで行って何すんの？」って言っていたんです、そしたらどうも話を聞いていると、世界遺産登録に向けて島根県と大田市と温泉津町と仁摩町を主体として調査を始めるのだという話でありました。それまでの経過、例えばこのように各大学や地域でそういう運動があって調査が進んでいたとか、そういうことは何も知らなくて、ずるずると引きずりこまれたわけでありました。

石見銀山遺跡を中心とし、それに関わる地域の文化財を保存して、銀山を中核とする、生産・流通・生活の実態等の先人の営為を振り返ろうというのが、世界遺産認定の趣旨であります。というのは銀山そのものだけではなく、それに関係する地域全体を保護するんです。だからいままでのようにお寺一つというのではなく、それを支えた再生産構造みたいなものを全体に網をかけてきちんと保護するということです。最近はその支えていた地域全体を遺産地域に認定するという風に傾向が変わってきて、その最たるものが石見銀山だろうというふうに思います。

そういう調査をするために、田中さんが委員長になったのですが、「考古学の方は僕が見るから、文献資料の方はあんた見てや」ということでした。しかし私は日本史だから、それに関係したスペイン・ポルトガル、スペインは中国で、ポルトガルは日本と協定を結んで権利を分け取りするのですが、その権利の分け取りが植民地支配としての分け取りか、商業区域としての分け取りかということは議論がありますが、中国などは植民地支配をしておりましたから、悪いくと、やはり植民地支配の分け取りだと思うのです。当面は、後の話になります銀と中国生糸の交易という貿易の時点の分け取りなのです。だからポルトガルの方が

日本にとっては重要になります。そういうところまで調査するのやと言われて、そりゃ大変だと言ったのですが、私がある頃大阪外国語大学に勤務していましたので、ポルトガル語から中国語からできる先生方が皆揃っておられるわけです。だから何とかそういう人たちに助けをいただいて、いけるかなというようなことで、それのお世話をするという形だったらまあいいやということでお引き受けしたわけです。

そういうわけで委員として入ったのですが、翌年には石見銀山文献調査団ができ、私が責任者となり、発足いたしました。もちろん文献調査団だけではなく、それ以前から銀山の発掘もしておりました。後で言いますように、灰吹法で銀が出来るのです。その灰吹の鍋も出てまいりましたし、銅銭なども出てまいりました。「銀の塊が出てきたら私も欲しいな」なんて言っていましたけども、それは出てきませんでした。

発掘調査団というのが一番大規模にやっております。それを田中さんが代表しておられて、それから鉾山技術で灰吹をやる鍋ですね、それは、明らかに私が見ても中世の鍋でしたが、姫路の鋳物師の芥田鍋と似たような格好をしております。鍋の中からは動物の骨が出てきました。骨で銅を溶かして出すのです。科学技術史の偉い先生を連れて、私もその時行ったのですが、

見ていて「本当にこんな小さい所でできるの？ 鍋して食べた跡じゃないの？ 身は食べて骨だけ残っているんじゃない？ 」とか言っていたのですよ。でもその他にもそういうところから出てきましたので、やはり灰吹法の鍋だとわかりました。日本風にちまちまとやって相当効率を上げる、イコモスというのが来て「こんな遺跡で」というような話があったらしいですけど、そんなに設備投資しないで効率を上げるのだと、それが日本の特色だということをもっと力説しておけばよかったと思いました。私もその灰吹鍋を初めて見た時にガクッとして「鍋をして食べた跡だ」と言ったのを思い出しまして、日本人でもそう思うのですから、外国人が「こんなところで」と思ったらしいのですよ。ものすごくご機嫌よかったらしいのですが、報告書は随分シビアだったようで、よくわからないなという感じでした。そういう鉾山技術の研究を奈文研の自然科学の人がやって下さいまして、村上隆さんという方です。



鉄鍋（大田市教育委員会蔵・提供）

それから山の中にすごい墓石がいっぱい出てくるのです。大きいのも小さいのも。おそらく候補の中には墓石なんかは無かったと思いますが、とにかくたくさん出てきて、その調査を島根大学の考古学の田中義昭さんがされました。キリシタンのお墓が、墓石が組み立て式になっていて、下に十字が書いてあるものが、十七世紀のもので出てきております。私が調査したポルトガルの史料にも、石見銀山には四、五人の敬虔なクリスチャンがいたと書いてあります。イエズス会の宣教師の報告が元になった史料ですから、功績を上げるためにそんな事を言っているのだらうと思っていたら、墓石が出てきたので本当だったのだと思いました。

それから山城ですね。鉾山のところには山口城という大きなお城があって、尼子氏と大内氏が取り合いをやっております。その他たくさん山城があるのです、小さいのも大きいのも。そのことをやった人もいます。それから大森町という代官町がありまして、徳川幕府になると直轄領になって、銀は全て徳川氏が取ってしまいます。それが建物も皆残っておりまして、伝統的建造物群保存地区にもなっている、その町のあり方を調べております。

それから小泉和子さんという方が、その酒屋経営もしていた町人の家を復元されまして、そこに残っていた衣装なんかも飾って綺麗に復元して、江戸から明治にかけての鉾山町の町屋の暮らしがぱっと見えるようにされました。それから伝統的建造物の町屋の調査は当然やられております。筑波大学の斉藤英俊さんという方ですが、港町もその方がやられたり、それから道路そのものの調査なんかもやられました。そのよ

うな総合調査の一環として文献調査を私がやったわけでありませぬ。

但し私が引き受けましたものは県並びに一市二町、主に県の研究費でやるのです。何らかの研究費を貰いますと、日限・年限を区切って報告書を出さないといけないわけでありませぬ。とにかく調査がしたいのはポルトガル・スペイン・イタリアそれから鎖国以降はオランダが全て権力を握りますので、オランダも。それから、韓国・中国・日本。七カ国ですからね、どんなにやりだしてもすぐには業績が上がらないのですよ。しかし二年に一度は調査報告書なるものを出さなくてはならない。もう一つは、今までの研究を咀嚼しないと新しいものが出てこないわけですよ。そういう両方でもって、今までそういう関係の研究をしている人を、お招きしてですね、研究会をずっとやっていったのです。

その前に私がなぜ引き請けたかということなのですが、私はもともと国内商業史だったんです。ところが私の先生の小葉田淳先生が、『日本鉱山史の研究』とか、貿易史の研究などのオーソリティーでいらっしやったわけですよ。その弟子だからといって私ができるとは限らないのですが、国内商業のついでだ、とうまく言われましてやることになったのと、一つは石見銀山のことを、小学館から出ている『体系日本の歴史』の一冊、『戦国大名』というのに書いていたのですよ。そこに統一政権に至るまでの戦国の情勢を書いて、その産業とか商業の話を書いていて、それに一番決定的なのが石見銀山の銀だという話を書いておりました。また、それに関する「物価より見た日明貿易の性格」という論文も書いていたわけですよ。

石見銀山は大永六年（1526）に神谷寿禎という博多の豪商が発見したわけですよ。そして天文二年（1533）に、どうもそれまでは韓国に原料の鉱石を持って行って銀を作ってもらっていたようなのですが、それをついに韓国技術者を二人連れてきてまして、灰吹法という方法で、銀に作るわけですよ。それはなぜ分かるかというところ、宗丹・桂寿という二人の朝鮮人が「我が国の売国奴」として『李朝実録』という李氏朝鮮の国の記録に書いてあるんです。けしからんのがいると、それで日本人が大量の銀を作りだしたというように書いてある。その前にも、日本人が銀鉱石を売りに来るということが書いてある。それから幕府の家来と称する坊さんが銀を売りに来るというのが『李朝実録』から全部分かるわけなのですよ。

それが灰吹法の鍋で現地で作っていたというのがわかるのですが、この灰吹法というのが九年後に生野銀山という兵庫県の鉱山に伝わっておりまして、いずれは佐渡へも伝わっていくわけですよ。そのことから、金銀の生産ラッシュというのが日本で起こりまして、金もそういう灰吹法でいけますので。中国から韓国に伝わり韓国が伝えてきた方法を日本の神谷寿禎が石見銀山で採用した、それが画期的なやりかたということになるわけですよ。そういうわけで日本では金銀の生産ラッシュが起こる。金は前から奥州なんかで出ておりまして、日本では昔から金が安く、銀が相対的に高く、それまでの室町時代の日明貿易なんかでは銀を輸入して金を持って行ってあります。それで金も安くはなるのですが、銀も大量に生産されて、金銀が山野に湧き出る有様になる。

銀山の発見に関しては伝説がありまして、神谷が船に乗って日本海を航海していると山が光って紫雲がたなびいている。その山に入って掘ってみると銀が出てきたと言うのです。しかし、神谷が船に乗っていたのはどっかの鉱山に行く途中であった、それは偶然ではない、探し回っていたのだと思うのですよ。その百年ほど前から中国は賈銭がいっぱい出てきて経済や貢納が混乱するのです。そこで中国は錢本位だったのが銀に切り替えていくのです。特に江南の方からは貢租を銀で納めるようになりまして、中国を中心とするアジア経済は皆、銀を探し回っているわけですよ。だから、神谷もずっとその辺りを探し回っていたわけですよ、偶然なんかではありません。

そしてその銀が発見されて七年後には灰吹で日本でも精錬ができるようになった。その直後、九年後に鉄砲が伝来いたします。一般には、鉄砲伝来なんかでも偶然、種子島に来たとか言うのですが、中国の大倭寇にポルトガル人が乗っていて、大倭寇の王直、これなんかはすごくインテリなのです。五峯先生とって、

大友宗麟へのプレゼントでも中国の書誌の、よほど学がある人しか喜ばないようなすごいのをさしあげている。それくらいの人なのです。その船が鉄砲を載せていた。それが二挺しかない鉄砲を種子島時堯に渡してしまったとされているみたいなのですが、倭寇船は軍船だから自分たちは最低一挺ずつは持っているはずですね。余分の二挺くらいか、もっとあったでしょうけどそれをあげたか、売ったかという話なのです。それから、種子島というのは鍛冶の島なのです。琉球列島などの島々の間では島同士の分業がちゃんとあるのです。そこで交易して皆あるものと無いものを交換する。種子島は鍛冶の島だから、直ちに一年後には鉄砲ができてしまったということなのです。ですから確証はありませんが、私は偶然到着したのではなく日本めがけて来ていたんだと。大倭寇の王直はその頃に初めて日本に来るのです。だからポルトガル人を乗せて日本に向けてきたのが、種子島に到着したのではないかという風に思います。それで鉄砲が伝来します。

その六年後にシャビエル、彼はフランスとスペインの間のバスクの人なんですね。イエズス会の一番偉い人はロヨラという人で、シャビエルは弟分ですが、それもバスクの人で、フランスとスペインが戦争した時にバスクはフランスについてスペインと対抗する。そして全部焼かれて滅ぶのです。ですからポルトガルの使いとしてやって来る。当然スペインではないのです。行ってみてよく分かったのですが、シャビエルが銀の島ということで日本目指してやって来て鹿児島へ上陸するということになります。それから二十七年経ちますが、ポルトガルの一番古い日本地図には石見銀山の所にポルトガル語で「銀鉱山」と書いてあります。そういうことで言いますと、いささか我田引水かもしれないが、銀を求めてやってきているのだということになります。銀がばっと出てきて相対的には金が安くて銀が高かったところが、金も安くなるのですが、やはり比重的に銀が安くなる。日本はひっくり返るのです。神谷が天文二年に灰吹法を取り入れるまでは、銀一枚（十兩）が錢五貫から七貫文だったのが天文八年ごろになりますと、どんどん下がって行って、1540年、50年代になると大体銀一枚が錢二貫文以下になり、三分の一ぐらいになります。それで日本へ入ってくる陶器が全て中国陶器になり、生糸もたくさん入ってくる。それと中国生糸と銀との貿易が主流になります。ポルトガルも大方中国と日本との交易で食べておまして、銀をそのまま本国に送っているわけではありません。

それからもう一つは、中国に行く船の中で、中国錢に造り変えてしまうのです。日本の銀のままではないのです。ですから幻の銀になってしまっているのですよ。

ともかくその灰吹法採用と銀がどんどん出る、あちこちの銀鉱山が開発されることで、銀の値打ちが三分の一になってしまうわけです。その計算をしていて、そういう論文とか、『戦国大名』（小学館、1988年）でそれを書いていたものですから、私にやれということになったんだらうと思います。で、その研究調査が始まった翌年に石見銀山歴史文献調査団が発足いたします。

しかしお役所仕事というのは一年二年で成果を出さないといけないのです。しかし研究はすぐには、成績出せないわけです。五、六年かかるわけです。困った、と思ったのと、手伝ってくれる人全員に共通認識がないと次にすすめないということで、それまでのこういう貿易とか鉱山、貨幣の専門の人、そういう人に依頼してレクチャーをしてもらって、そのテープを起こして、資料集を作るにしても何にしても皆さんの共通認識を高めました。だから三人か四人ずつお招きして一、二泊して銀山を見てもらって研究会の報告をしてもらい、東京や関西やあちこちから専門の方々を呼んだのです。そして二、三ヶ月に一回研究会をやりましてです



ね、二年後にその報告集を作りました。まず私の先生の小葉田淳先生とか、日本に関しては佐渡の鉾山史の専門の田中圭一さんとか、オランダ貿易の永積洋子先生とか、博多をやってる武野要子さんとか、技術史の科学博物館の山田慶児さんや鈴木一義さんをお招きして、問題別・地域別に並べなおしたのですが、次は海外貿易ということで、田中健夫先生とか村井章介さんとか。中国史の方、西洋のオランダ貿易とかを研究されている方、それからイエズス会のエンゲルベルト・ヨーリッセンさんが一番イエズス会についてはご専門です。そういう方々をお招きして順番にレクチャーしてもらって、合宿して勉強会を致しました。その後二年後に本を作って、業績を形にしたわけです。これは非常に役に立ちました。

この間は勉強会だけしていたのではなく、分担して史料を全て探索する。日本国内、ポルトガル・スペイン、イタリアのイエズス会の史料、上智大学の学長をしていたピトウ先生という方がイエズス会の一番偉い先生になっておられまして、ローマ・ヴァチカンにあるイエズス会図書館の史料閲覧に便宜を図っていただきました。今まで『耶蘇会士日本通信』とかいろいろなものが翻訳されております。しかしそれは経済関係がわりと抜けているのですよ。明治以降のそういうイエズス会関係の研究というのはキリスト教中心なのです。ところがイエズス会というのは、ポルトガルやスペインの貿易利益から何割かを取れる権限を持っている。イエズス会自身も貿易を行なってそれを布教費用に当てている。そして少年遣欧使節を連れて行ったヴァリニャーノがイエズス会同士の内輪もめで、利権の問題が絡んでいて、『弁駁書』なんかを書いて、イエズス会で色々釈明をしている。それにはお金がどう動いてという話を書いてある。しかし弁解文ですから要所要所にラテン語なんかを使いまして非常に難しく、私ごときの者には何が何やらわからない。それを京大のヨーリッセンさんが訳してくれました。彼はわかっているんだけど、日本語に直してもらおうとその日本語が私にはわからない。それをまた外大の卒業生で今東大の史料編纂所の助手をしている岡美穂子さんに直してもらい、やっと日本人が読んでわかるようなものになる。もう最後の方は大変な苦勞を致しました。

中国とか韓国漢文とかも、とても難しく最後の方はひいひい言いました。最終的には五、六年経ちまして考古学の方も寄って研究論文集を作りました。それから史料の主なもの、本朝初訳というようなものも収録した史料集を作りました。日本に関係する世界の鉾山の年表も作りました。そういうわけで七カ国調べたわけなのですが、外大の先生方や知り合いの方々を動員して皆一生懸命やってくださいました。それからもう一つはですね、『銀山旧記』という文化十三年の古い書物があるのですが、それは島根大学准教授の日本近世思想史を専攻している小林准士さんが校訂してくださいまして、非常に良くできた資料校訂です。

(二) 編年史料綱目の作成

このように七カ年の成果をまとめて本にしたわけですが、どういう形でやりましたかということ、編年項目作業というのは、基礎作業として判明する確実な期日というのを、伝聞資料の場合はいつ頃どのように書かれたというのが事実かどうかかわからないので、そういうニュアンスをつけて入れてあります。確実な期日を大体編年順に並べると、日本の金銀銅山という鉾山がどういう形で発掘や流通がなされたのかが判明していけますので、編年順の資料の項目を作ったわけです。それは一つはデータベースの作成。既存の研究からその目録に載せる部分を大学院生などを動員して抽出させ、ファイルを作りました。既存の研究書から史料を抜いて、それを実際のものと同様に照らし合わせて考える。孫引きはいけないとはいっていますが、やはり研究成果を重視しなければなりませんので。そうするとやはり元がわからないというものも出てきて、「この先生はいい加減だ」と院生が言うとか、そういう笑えないこともありましたけども、それをきちんと確かめて、確証が得られるものをずっと編年順にまとめていったわけです。それからもちろん原点に戻って、確認するわけですね。

それからまた石見などは地元である島根大学の小林准士さんを中心にいたしまして、調査していただい

て、そこから資料を抜き出すという形で相当盛り込んでおります。東京の史料編纂所などに行ってそこにしかない史料も、多少は入れられました。それを七カ国相手にやったわけです。

三番目としましては、石見銀山における灰吹法の開発が銀の大量産出の元になったわけですが、その具体的なあり方。それから国内の社会経済・政治経済に及ぼす影響の解明ということ。それが世界貿易状況に対してどういう風に影響したか、これはどうも大きすぎて、よく分からなかった。東洋におけるそういう影響のあり方というのは分かるんですけど、ポルトガルとスペインは東洋の中をぐるぐる回ってて、その利益だけがイエズス会を通じてポルトガルに吸い上げられているという状況で。それが中心になって大きな世界経済へと発展するという話は、能力の違いか現実の違いか、できませんでした。それを2002年に石見銀山の年表・史料項目編として完成いたしました。史料項目編は大日本史料形式に致しましたが、それはどこかで毎日のように合宿をしまして徹夜に近く頑張らして、もう死んでしまうと金切り声を上げた人もいました。もう一つ面白かったのが、中国韓国の貿易事情というのが、だいぶ分かった。中国や韓国の留学生が日本史にはたくさんいまして、その人たちを動員して調べたのですが、密貿易の実情が中国の史書とか韓国の史書とかでずいぶん出てくるのです。

それからもう一つはイエズス会の経済史料の翻訳ですね。これはポルトガルの大学の日本語学科に委託致しまして、その日本語学科の大学院の学生が先生の下で訳して、送ってくるわけです。ヴァリニャーノのイエズス会の商業活動に対する弁明書、これはイエズス会の図書館がローマにありまして、そこから見せてもらったのですが、これはさきほども言いましたが、ものすごく難しかった。弁解するというのは、婉曲にうまく言うから余計に難しいのですね。日本語で書かれても難しいと思うのです。

それからシェイクスピアのヴェニス商人のように、投資をするんですよ。船が帰ってきたらお金を投資するのです。「投げ銀」と言いまして、長崎の商人なんかがやるのです。その証文が長崎にはずいぶんありまして、その船が沈没したらおしまいだけど、帰ってきたらどうのこうの、というそういう証文。そういうものを調べたりしました。

せっかくこれだけ史料を作ったので、島根に資料館を作って、そこへ行けば銀関係、ひいては鉱山関係の史料がみんな見られて、そういう研究のメッカになるようにやってほしいとっております。

(三) 『銀山旧記』の復刻

先ほど言いましたように、島根大学の小林准士さんが『銀山旧記』という地役人が書いた、それが他に史料がありませんから、定説ならざるをえない史料を大変綿密に本文に注釈、解題をつけるというようなことをやってくれました。これがさきほど申し上げました年表作成に次ぐもう一つの業績です。

(四) 「研究論文編」の刊行

それから文献調査団としては越権行為なのですが、考古学の発掘も入れてそういうのに関わる方が、皆論文を書こうということでチームになりました。史料を集めた人たちに資料集だけ作らせて、さようならというのは申し訳ないので、皆論文を書きましょうということで。その人たちの皆ではありませんが、書いてくださったのが『論文編』です。あらゆる分野の中で浮かび上がってきたものです。

(五) 発掘によるその他の業績

発掘による業績としましては、灰吹法による銀の作り方が自然に明らかになりました。そういうところがこの本の村上隆さんの論文で詳しく書かれています。中世の遺跡はほとんどなくて、江戸時代になると大規模にやっているの、こんな小さな鍋でチマチマ行っていると聞いて外国人はびっくりしたのでしょうか

ね。こんなのでやっているのだ、と思ったのでしょうか。それが日本史なのだという強調が足りなかったなと思います。やはりそれを逆手に取って訴えかける気合が足りなかった。

それから銀をいっぱい取っているのに実際に流通しているのは銅銭。それも無紋銭といって中世ではより分けて捨てるようなのが、鉱山の中で流通しているんです。その状況がすごくよく分かって、他の堺の町などとは全然違うお金の流通状況が分かりました。それは鉱山の生活というだけではなく、各地の庶民遺跡の一つのメルクマールというか、そういうものの尺度になるだろうと考えています。

それからこれは私の失敗なのですが、前にも申したように、キリシタンの墓が出てきました。実を言うとイエズス会の宣教師の通信として、石見銀山には敬虔なクリスチャンが四、五人いるとか、そういうことが書いてある。資料集の中でこんなのは嘘っぱちだと年表には入れてなったのですよ。そうしたら十七世紀の初頭ですけど、十字架が隠されている墓が出てきて、やはり本当だったのだと思ったけれど、既に本は出来てしまっていたので残念なことをいたしました。しかし銀山の中の墓石などは島根大の田中さんが、銀山を上から下まで墓石を全て調べてくださっています。もちろん、墓石が無くて死んだ人もいっぱいあります。鉱山は鉱夫だけの惨めな生活とお思いでしょうが、山師などもたくさんいましたし、相当豊かな生活です。そういうことが分かってまいりました。

それから関が原合戦後に徳川が接収した後は、銀は銀山から山越えて広島の方へ出て、そこから船で大坂へ行くんですね。今広島の方でどこの港から船が出たのかで争っているようですが、その前は中世の沖泊というのと同ヶ浦という港がありまして、そういう港と港町と、銀山へ上がっていく流通路。そういうものの調査も行なわれています。それから大森の町並み。お酒屋さんもし、銀山の請け負いもした熊谷家というのも残っておりまして、前にも云いましたように、そこを小泉和子さんという筆筒とか家具とかの研究を良くやっておられる方が復元して、猫まで作って。文書がいっぱいあって、その資料調査を小林さん中心にやっているんですが、ちょうどそこへ私が調査に行った時にはおばあさんが倒れられて病院にいらっしゃったんですが、それまでずっと住んでいらっしゃったものですから、引き出しなんかにはハンカチや装身具などが入ったままで、ちゃんと管理しないと物を紛失してしまうかもしれないとヒヤヒヤしました。その文書を全て調査して、江戸時代の文書もあって、そこは酒屋さんを江戸・明治頃にやっておられて。それが綺麗に復元されております。なかなかおもしろいものになっているのではないかと思います。

もう一つお話したいのが、私六歳から仕舞をやっておりまして、中学一、二年の頃は能もやりまして、『橋弁慶』の牛若丸もやったんですね。中学から謡もやりまして、高校から小鼓をやりまして、大学の時には笛をやって。それから能を12、3番演じておりました。そしたら文書調査をしておりましたら『石見銀』という江戸時代の人が作った謡の本が出てきました。毛利が関が原に敗れ、徳川が石見銀山と佐渡銀山を直轄地にして大久保石見守という人を長官に致します。ところが大久保石見守というのは猿楽師あがりです。うとうう腕をふるうのです。ですからそのせいでしょうか、また代々の奉行は家来を連れて石見へ来るのですが、それとは別に現地の武士、「地役人」というのが大森の町に住んでいる。金持ちの町人とか、大森は銀山城下町ですので。それで、大久保石見守は能面を三つ大森に寄進しています。能楽、謡は江戸の武家文化です。そうすると大森の地役人で一番偉いくらいの人、野沢晟正という人らしいですが、その人が『石見銀』という謡を作った。これは能ではなく謡なのです。おもしろいのでこれを能にしてやればいいんじゃないと言ったら、やってくれと言われまして、私は初めて『石見銀山』という能楽を作って、去年上演いたしました。今年の世界遺産登録の式典の後にまた上演することになりました。

外国の方ばかり調査しておりましたので、島根の史料調査はかえって手薄になっているのですが、それはもう島根大学の方々にお任せして、私はもう任務は終わりということで。また、世界遺産になりましたので、めでたしめでたしということで、このお話を終わらせていただきたいと思います。